

## 病 理 学 講 座

教授：羽野 寛	人体病理学：特に肺・肝の臓器病理学
教授：山口 裕 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に腎・泌尿器の病理，移植臓器の病理
助教授：福永 真治 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に軟部腫瘍・産婦人科の病理
助教授：酒田 昭彦 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に肺・心の病理
助教授：鈴木 正章 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に泌尿生殖器・腎細胞癌・乳癌の病理
助教授：池上 雅博	人体病理学：特に消化管の病理
講師：千葉 諭	人体病理学：特に肝・骨髄・循環・膝・胎生形態学の病理
講師：菊地 泰	実験病理学および分子病理学：特に腫瘍学
講師：二階堂 孝	人体病理学：特に骨軟部腫瘍・リンパ節の病理診断学
講師：加藤 弘之 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に泌尿生殖器の病理，細胞診断学
講師：鷹橋 浩幸 (病院病理部に出向中)	泌尿生殖器の分子病理学と診断学
講師：清川 貴子	外科病理学：特に婦人科の病理，細胞診断学
講師：野村 浩一 (病院病理部に出向中)	外科病理学：特に婦人科の病理
講師：金網友木子 (病院病理部に出向中)	人体病理学：特に腎組織病理

## 研究概要

### I. 肝臓に関する研究

1. 慢性ウイルス性肝炎による門脈枝障害の成因を探るため、E-selectin, ICAM(接着分子), eNOS(血管内皮細胞保護作用)で免疫染色した。ICAM発現は少数, E-selectinは全例に門脈枝, 中心静脈に陽性だった。eNOSも同部位に発現したが, 門脈枝で減弱傾向があった。門脈枝障害には接着分子の発現増強, eNOSの発現減弱が関与していると推定している。

2. Ductular reactionおよびprogenitor cellsの研究; 閉塞性黄疸でみられる細胆管の形成を明らかにするために, 1) CK7, CK19, HepPar1免疫染色を用いて biliary type cell, hepatocyte, CK7

-positive hepatocyte, intermedaire cellの同定 2) 閉塞性黄疸症例の組織連続切片から, 細胆管の再構成を行っている。増生細胆管では, これら3種の細胞が混在し, 病期で構成が変化した。細胆管の再構成では有効枝, 無効枝など複雑な様相を呈している。

3. 肝硬変での酸化ストレスと細胞増殖関連抗原の発現から, 酸化ストレスによるDNA傷害とその修復状況について検討した。DNA酸化損傷マーカー8-OHdGは, 肝細胞に広範, 高頻度に発現していた。細胞増殖関連抗原PCNAも, 高頻度で発現し, この発現は, DNA修復肝細胞と考えられた。肝硬変では酸化ストレス下でDNA傷害と修復が盛んに行われていることが示唆された。

4. 正常肝, 慢性肝炎, 肝硬変におけるリンパ管の変化について正常肝, 慢性肝炎, 肝硬変症例をD2-40(リンパ管マーカー), CD34(血管内皮マーカー)にて免疫染色を行った。正常肝では門脈域に僅かにリンパ管を認め, 慢性肝炎, 肝硬変ではリンパ管の増加, 拡張が見られた。この所見は肝線維化と相関性があった。

### II. 腎に関する研究

1. 腎細胞癌培養株を用い, HDAC1阻害剤であるトリコスタチンAによる増殖抑制をみたところ効果が見られた。そこでトリコスタチンA使用株と非使用株のRNAで発現DNChip解析を行ったが変動を呈する遺伝子は見られなかった。このため増殖抑制の方法をこの系で発現している細胞周期関連遺伝子をRNAiでブロックするものに変更しその候補遺伝子の検索を行っている。

2. 移植腎の生検組織を対象とし, 続発性腎尿管障害発生における拒絶反応の関与について解析を試みている。

3. IgA腎症組織学的予後判定基準(厚生労働省・日本腎臓学会編IgA腎症診療指針第2版)の改訂案作成のため, 臨床・病情報データをデータベース化する方法を考案した。内科275例, 小児科100例のIgA腎症腎生検材料が収集され統計的検討の結果, IgA腎症組織分類の改訂点を絞ることができた。また, IgA腎症国際病理組織分類作成のため, 組織診断の国際的標準化に関して海外研究者と共同研究である。

4. 悪性高血圧性腎症生検例の組織学的解析を行った。画像解析ソフトにて半定量的に糸球体硬化, 尿管間質病変と血管病変の相関を求めた。細動脈病変は糸球体硬化度に関連し, 小葉間動脈病変は尿管上皮の急性障害と間質線維化と相関し, 腎予後

に関係した。

5. MPO-ANCA 関連腎炎生検例の組織学的解析を行った。血管炎は高齢者に多く、CRP 値と関連し、その他の因子との相関は無かった。血鉄症が尿細管上皮と間質に際立って見られ、糸球体や尿細管間質の活動性病変と相関し、血尿の程度に関連した。生検後2年後の腎機能とは糸球体と間質の慢性病変が関連した。

#### 6. 移植腎に関する研究

1) 慢性拒絶反応例の組織学的解析で中等度から高度の peritubular capillaritis と基底膜肥厚とが慢性拒絶反応に関連した。

2) 慢性移植糸球体症では、血管内皮の phenotype がその程度と共に変化し caveolae 増生を示す内皮に置換され、蛋白尿と関連した。

7. 嚢胞に接して発症した腎細胞癌；腫瘍全体が嚢胞状であるものから、一部が嚢胞状であるものまで、スペクトラムがある。嚢胞状の部が50%以上である場合、転移例はなく予後は極めて良好である。

### III. 消化管に関する研究

1. 胃；噴門部癌の粘液形質について検討した。噴門部から発生した癌は分化型腺癌が多く、胃型形質を示すものでは浸潤するとともに低分化型腺癌に移行するものが多かった。

2. 大腸；(1) 大腸 sm 癌における転移の危険因子について、特にリンパ管侵襲を D2-40 染色にて同定し、他の因子と共に多変量解析を行った。sm 浸潤度、リンパ管侵襲が転移危険因子としてあげられた。

(2) 大腸 sm 癌において、簇出とリンパ管侵襲との関係について D2-40 免疫染色を用いて検討した。簇出の程度の増加に伴い、リンパ管侵襲の頻度が増加していた。

### IV. 産婦人科に関する研究

1. 生検、剖検材料として得られた病理組織標本を用いて、特に女性生殖器臓器腫瘍の性状の検討を行う。

2. 子宮と軟部組織の perivascular epithelioid cell tumor について臨床病理学的検討を行った。

3. 子宮内膜間質肉腫の臨床病理、組織化学的研究。

#### 4. 転移性卵巣腫瘍の病理

5. 抗リン脂質抗体症候群 (APS) のモデルマウスを作製し、腎臓と胎盤の微小循環系の形態変化を観察した。光顕的には有意な所見は得られなかったが、電顕的に腎糸球体における内皮孔の配列不整、胎盤

血管基底膜の splitting が見られた。これらの所見は APS における初期変化 (可逆的変化) を反映していることが強く示唆された。

### V. 泌尿生殖器に関する研究

1. 前立腺癌に関する臨床病理学的研究では2005年に改定されたグリソン分類 (ISUP2005) に従って前立腺針生検のグリソン分類評価法 (separate scoring と global scoring) について、日本人症例で比較検討した結果、中間グレードと高グレードの判定には ISUP が推奨する separate scoring が有効であることを発見した。分子病理学的には微小癌の LOH 解析を行い、癌体積 50 mm<sup>3</sup> 以下の微小癌では臨床癌と比較して有意に LOH 頻度が低いことを示した。

### VI. 呼吸器の病理に関する研究

1. 原発性肺癌の臓器転移の実態を解明するべく慈恵医大で行われた787例の肺癌剖検症例をデータ化し、臓器遠隔転移、直接進展の頻度を算出した。更に臓器転移頻度が年齢、性別、原発巣大きさ、組織型等の要素 (mode) にどのように影響されているかを検索した。

### VII. その他

1. 肝細胞がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の検索を最終目的とし、切除された33例の肝細胞がんについて8番染色体領域にあるマイクロサテライトマーカーにてPCR-LOH解析を行った。結果、8番染色体領域に存在する61のマイクロサテライトマーカーから16のinformative markerを選出し、肝細胞がんの発生に最も関連する染色体領域8p23-22を候補領域として見出した。

#### 「点検・評価」

スタッフの基本的業務：業務は教育、研究、診断業務である。平成18年度の病理学講座のスタッフは教授1人、助教授1人、講師3人、助手2人でスタートし、この陣容で1年間の業務を遂行した。病院病理部には教授1人、助教授3人、講師2人、助手2人が派遣されている。講座関係者に退職者はいなかったが、18年10月末日をもって病院病理部河上牧夫部長 (大学直属) が退職されたのを機に、それまでも講座から病院病理部には2人のスタッフがそれぞれ週1日応援に出ていたが、更なる応援を余儀なくされた。病理学講座は従来から基礎講座 (教育、研究) に属しながら、一方で病理診断業務を通して病

院業務も担うという構造になっており、病院病理部における事情は講座に直接影響するという関係にあるためである。近い将来深刻な人材不足が懸念される状況下において、講座、病院病理部のそれぞれの業務遂行を滞りなく行うためには、現在の体制を見直す段階にきているのではないかと思う。

教育：病理学講座の担当している座講は、3年生コース臨床基礎医学I、4年生コース臨床医学Iが中心であり、病理学領域の講義を行った。3年生臨床基礎医学では、それぞれのユニットで病気の成り立ち、特にその形態学的側面から病理総論をベースとする講義を行った。4年生における臨床医学Iは過去の病理学各論に相当するもので、臓器別のそれぞれのユニットで講義を行った。演習・実習関係では、3年生病理学総論実習、症候学演習、研究室配属、4年生病理学各論実習、6年選択実習、CPCなどである。3年生および4年生病理学実習では、例年通り教員1人が12人-18人の学生を担当するというグループ担当制を採用して、木目の細かい指導を行い学生からも一定の評価を得た。6年生選択実習は4フェーズにわたって行われた。方式は例年通りKursusを中心に、実践的な面も取り入れ行われた。受講した学生からは概ね良い評価を得ている。しかし、このKrusus方式も、学生の自主学習や教員員の負担を考えると、見直す時期に差し掛かっているのではないと思われる。今後検討が必要である。CPCは病院病理部の応援を得てモデルCPCを含めて合計11回行われた。国家試験を控えた学生の反応は鈍いのが実情である。

病理診断および病理業務：委託研究としての診断業務、院外から依頼される剖検についても、社会的貢献を意識してできるだけ対応した。また本年より厚生労働省による「医療関連死に関するモデル事業」に参加、法医学講座、臨床講座と協力して院外の2例の剖検を行った。

研究：病理学講座は、本学の伝統である人体病理学を中心に研究活動を行っており、適宜分子病理学的方法も取り入れている。その内容と成果は研究概要を参照していただきたい。今年提出してもらった自己点検・評価を見ると、多くの人が、診断業務や教育などのルーチンワークの多さに、研究とのバランスをとるのに苦慮しているのが分かる。しかしたとえ時間がかかろうとも、研究は全ての基本であるから鋭意努力すべきである。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) Lu W, Takahashi H, Furusato B (AFIP), Mae-kawa S (Ogawa Red Cross Hosp), Ikegami M, Sudo A, Egawa S, Hano H. Allelotyping analysis at chromosome arm 8p of high-grade prostatic intraepithelial neoplasia and incidental, latent, and clinical prostate cancers. *Genes Chromosomes Cancer* 2006; 45: 509-15.
- 2) Lu T, Hano H, Meng C, Nagatsuma K, Chiba S, Ikegami M. Frequent loss of heterozygosity in two distinct regions, 8p23.1 and 8p22, in hepatocellular carcinoma. *World J Gastroenterol* 2007; 13(7): 1090-7.
- 3) Kanetsuna Y, Hirano K<sup>1)</sup>, Nagata M (Univ of Tsukuba), Gannon AM<sup>1)</sup>, Takahashi K<sup>1)</sup>, Harris CR<sup>1)</sup>, Breyer DM<sup>1)</sup>, Takahashi T<sup>1)</sup> (<sup>1</sup>Vanderbilt Univ). Characterization of diabetic nephropathy in a transgenic model of hypoinsulinemic diabetes. *Am J Physiol Renal Physiol* 2006; 291: F1315-22.
- 4) Fukunaga M. Atypical ovarian endometriosis. *Pathol Case Rev* 2006; 11: 38-42.
- 5) Matsuyama A<sup>1)</sup>, Hisaoka M<sup>1)</sup>, Shimajiri S (Kyushu Kousei Nenkin Hosp), Hayashi T (Nagasaki Univ), Imamura T (Teikyo Univ), Ishida T (NTT MC Kanto Med Centr), Fukunaga M, Fukuhara T (Hiroshima Prefect Hosp), Minato H (Kanazawa Univ), Nakajima T (Gunma Univ), Yonezawa S (Kagoshima Univ), Kuroda M (Fujita Health Univ), Yamazaki F (Saga Prefect Hosp), Toyoshima S (Kitakyushu Municipal Med Centr), Hashimoto H<sup>1)</sup> (<sup>1</sup>Univ of Occupational and Environmental Health). Molecular detection of FUS-CREB3L2 fusion transcripts in low-grade fibromyxoid sarcoma using formalin-fixed, paraffin-embedded tissue specimens. *Am J Surg Pathol* 2006; 30: 1077-84.
- 6) Fukunaga M, Fujiwara Y<sup>1)</sup>, Naito Z<sup>1)</sup> (<sup>1</sup>Nippon Med Sch). Hepatoid carcinoma with serous component of the fallopian tube: A case report with immunohistochemical and ultrastructural studies. *Int J Gynecol Pathol* 2006; 25: 233-8.
- 7) Oikawa H<sup>1)</sup>, Oka K<sup>1)</sup>, Nagakura S<sup>1)</sup>, Fukunaga M, Sando N<sup>1)</sup>, Kashimura J<sup>1)</sup> (<sup>1</sup>Mito Saiseikai General Hosp), Hakozaki H (Fukushima Rosai Hosp). Spindle and giant cell type undifferentiated carcinoma arising in the common bile duct: A case report. *Pathol Res Pract* 2007; 203: 179-84.

- 8) Kanayama R<sup>1)</sup>, Oka K<sup>1)</sup>, Fukunaga M, Tomisawa H<sup>1)</sup>, Takahashi Y<sup>1)</sup>, Okano M<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Mito Saiseikai Geniral Hosp), Hakozaki H (Fukushima Rosai Hosp). Spindle cell carcinoma arising in the pharynx, with granulocytosis and high serum granulocyte colony stimulating factor titre. *J Laryngol Otol* 2007; 121: 597-600.
- 9) Yumura W<sup>1)</sup>, Imasawa T (Chiba-East Nat'l Hosp), Suganuma S (Tokyo Women's Med Univ), Ishigami A<sup>1)</sup>, Handa S<sup>1)</sup>, Kubo S<sup>1)</sup>, Joh K, Maruyama N<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Metropolitan Inst of Gerontology). Accelerated tubular cell senescence in SMP30 knockout mice. *Histol Histopathol* 2006; 21: 1151-6.
- 10) Walker DP (Little Rock), Ferrario F (San Carlo Borromeo Hosp), Joh K, Bonsib MS (Indiana Univ Med Center). Dense deposit disease is not a membranoproliferative glomerulonephritis. *Mod Pathol* 2007; 20: 605-16.
- 11) Yamamoto I, Yamaguchi Y, Yamamoto T, Hosoya T, Horita S<sup>1)</sup>, Tanabe K<sup>1)</sup>, Fuchinoue S<sup>1)</sup>, Teraoka S<sup>1)</sup>, Toma H<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ). A pathological analysis of lymphatic vessels in early renal allograft. *Transplant Proc* 2006; 38: 3300-3.
- 12) Shimizu T<sup>1)</sup>, Tanabe K<sup>1)</sup>, Miyamoto N<sup>1)</sup>, Tokumoto T<sup>1)</sup>, Ishida H<sup>1)</sup>, Toma H<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. Early and late histopathological changes in renal allografts procured by laparoscopic donor nephrectomy. *Clin Transplant* 2006; 20(Suppl 15): 11-5.
- 13) Wakui S, Yokoo K, Takahashi H, Muto T, Suzuki Y, Kanai Y, Hano H, Furusato M, Endou H. Prenatal 3, 3', 4, 4', 5-pentachlorobiphenyl exposure modulates induction of rat hepatic CYP 1A1, 1B1, and AhR by 7,12-dimethylbenz[ $\alpha$ ]anthracene. *Toxicol Appl Pharmacol* 2006; 210: 200-11.
- 14) Wakui S, Yokoo K, Muto T, Suzuki Y, Takahashi H, Furusato M, Hano H, Endou H, Kanai Y. Localization of Ang-1, -2, Tie-2, and VEGF expression at endothelial-pericyte interdigitation in rat angiogenesis. *Lab Invest* 2006; 86: 1172-84.
- 15) Shida T<sup>1)</sup>, Furuya M<sup>1)</sup>, Nikaido T, Hasegawa M<sup>1)</sup>, Koda K<sup>1)</sup>, Oda K<sup>1)</sup>, Miyazaki M<sup>1)</sup>, Kishitani Y<sup>1)</sup>, Ishikura H<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Chiba Univ). Sonic hedgehog-Gli1 signaling pathway might become an effective therapeutic target in gastrointestinal neuroendocrine carcinomas. *Cancer Biol Ther* 2006; 5: 153-8.
- 16) Matsushita K<sup>1)</sup>, Ochiai T<sup>1)</sup>, Shimada H<sup>1)</sup>, Kato S<sup>2)</sup>, Ohno T<sup>2)</sup>, Nikaido T, Yamada S<sup>2)</sup>, Okazumi S<sup>1)</sup>, Matsubara H<sup>1)</sup>, Takayama W<sup>1)</sup>, Ishikura H<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>Chiba Univ), Tsuji H<sup>2)</sup>(<sup>2</sup>Nat'l Inst of Radiol Sci). The effects of carbon ion irradiation revealed by excised perforated intestines as a late morbidity for uterine cancer treatment. *Surg Today* 2006; 36: 692-700.
- 17) Goda K, Tajiri H, Ikegami M, Urashima M, Nakayoshi T, Kaise M. Usefulness of magnifying endoscopy with narrow band imaging for the detection of specialized intestinal metaplasia in columnar-lined esophagus and Barrett's adenocarcinoma. *Gastrointest Endosc* 2007; 65: 36-46.
- 18) Tozaki M, Fukuda K, Suzuki M. Dynamic high-spatial-resolution MR imaging of invasive ductal carcinoma: Influence of histological scirrhous component on MR descriptors. *Magn Reson Med Sci* 2006; 5: 137-46.
- 19) 原田 徹, 河上牧夫, 氏田万寿夫, 斉藤祐二, 尾高真, 佐藤修二, 秋葉直志. 原発性肺癌の臓器転移に関する解析(第二報). 慈恵医大誌 2006; 121: 223-40.
- 20) 原田 徹, 河上牧夫, 羽野 寛, 氏田万寿夫, 斉藤祐二, 尾高 真, 佐藤修二, 秋葉直志. 原発性肺癌のリンパ節転移に関する解析(第三報). 慈恵医大誌 2007; 122: 1-10.
- 21) 小峯多雅, 河野 優. (補遺)胸腺摘出標本の組織学的検討—とくに重症筋無力症との相関を中心に—. 慈恵医大誌 2006; 121: 177-8.
- 22) 大田敏之<sup>1)</sup>, 坂野 堯<sup>1)</sup>, 城 謙輔, 古江健樹<sup>1)</sup>, 藤井 寛<sup>1)</sup>, 中村朱里<sup>1)</sup>, 須藤哲史<sup>1)</sup>, 小野浩明<sup>1)</sup>, 木下義久<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>県立広島病院). 巣状糸球体硬化症虚脱型亜型の3例. 日小児腎臓病会誌 2006; 19: 83-8.
- 23) 古澤美由紀<sup>1)</sup>, 田邊一成<sup>1)</sup>, 石田英樹<sup>1)</sup>, 石塚 敏<sup>1)</sup>, 安尾美年子<sup>1)</sup>, 東間 紘<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>東女医大), 山口 裕. Flow cytometry crossmatch (FCXM) B cell 陽性症例における移植腎臓成績について. 移植 2006; 41: 124-8.
- 24) 古澤美由紀<sup>1)</sup>, 石田英樹<sup>1)</sup>, 石塚 敏<sup>1)</sup>, 白川浩希<sup>1)</sup>, 安尾美年子<sup>1)</sup>, 山口 裕, 田邊一成<sup>1)</sup>(<sup>1</sup>東女医大). 抗HLA 抗体の変化と慢性移植腎症発症についての検討. 移植 2006; 41: 356-61.
- 25) 池上雅博, 劉 鉄成. 各々の定義によるIICおよびIIC由来sm 癌の転移と転移危険因子—大腸癌発育様式(PG, NPG分類)からみて. 早期大腸癌 2006; 10: 119-26.
- 26) 斎藤彰一, 池上雅博, 益子貴博, 佐藤泰弘, 田尻久雄. LSTの診断と治療—通常・拡大内視鏡観察による深達度診断と治療戦略. 早期大腸癌 2006; 10: 411-8.

## II. 総 説

- 1) 福永真治. 異型子宮内膜症の診断基準と臨床病理. 病理と臨 2006; 24: 270-3.
- 2) 福永真治. 頭頸部の血管肉腫. 日医新報 2006; 4271: 115-6.
- 3) 城 謙輔. 腎生検病理 ABC—臨床に役立つ腎病理診断法の手引き—一次系糸球体疾患—二次系糸球体腎炎の理解のための組織病型の基本とその鑑別について—. 病理と臨 2006; 24: 1031-42.
- 4) 城 謙輔. IgA 腎症の組織活動性評価と国際分類化への視点. 医のあゆみ 2006; 219: 561-70.
- 5) 山口 裕. 臓器移植の病理学. 総合臨 2006; 55: 2012-7.
- 6) 山本 泉, 山口 裕. 腎移植—質の時代へ—Banff 分類. 腎と透析 2006; 61: 504-8.
- 7) 山口 裕. 腎病理診断標準化—その現状と将来への展望—腎尿管間質病変と血管病変の標準化への提案—Banff 分類の応用と革新. 医のあゆみ 2006; 219: 587-91.
- 8) 山口 裕, 堀田 茂(東女医大). 各臓器, 疾患で用いられる抗体とその応用—腎—糸球体腎炎と移植腎. 病理と臨 2007; 25(臨時増刊): 99-106.
- 9) 清川貴子, 濱田智美. 病理診断に役立つ免疫組織科学の新しいマーカー 卵巣顆粒膜細胞腫と類内膜腺癌の鑑別への応用. 診断病理 2007; 24: 18-20.
- 10) 清川貴子, 濱田智美. 各臓器, 疾患で用いられる抗体とその応用—女性生殖器—子宮. 病理と臨 2007; 25(臨時増刊): 127-33.

## III. 学会発表

- 1) 鹿 巍, 鷹橋浩幸, 古里征國, 前川 傑, 池上雅博, 孟晨曦, 有馬美佐子, 羽野 寛. Allelotyping analysis at 10q of HGPIN and clinically insignificant and significant prostate cancers. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 250]
- 2) 中野雅貴, 鷹橋浩幸, 鹿 巍, 古里征國, 羽野 寛. 前立腺微小癌における 13q, 6q, 8p 領域の LOH の解析. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 250]
- 3) 鷹橋浩幸, 古里征國, 中野雅貴, 鹿 巍, 羽野 寛, 河上牧夫. 針生検からみた日本人前立腺癌の動向～天皇陛下の癌罹患ニュースとの関連～. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 220]
- 4) 永妻啓介, 羽野 寛, 鹿 巍, 中山順今, 千葉 諭, 松浦知和.  $\alpha$ -amanitin 投与における肝障害ミニプラモデルの肝障害像と細胞動態の検討. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 370]
- 5) 孟 晨曦, 鹿 智恵, 羽野 寛, 栗原邦弘. 胎仔マ

- ウス四肢の形態形成における FGF-2, FGFR およびアポトーシスの発現. 第 123 回成医学会総会. 東京, 10 月. [慈恵医大誌 2006; 121: 263]
- 6) 清川貴子, 濱田智美, 羽野 寛. (シンボジウム) 卵巣性索間質性腫瘍の診断への応用. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 141]
- 7) 三浦由記, 芦川智美, 川口真裕子, 八木澤幸子, 本間隆志, 戸田敏久, 新崎勤子, 濱田智美, 鷹橋浩幸, 鈴木正章. 乳癌の転移と鑑別に苦慮した胸壁悪性中皮腫の一例. 第 47 回日本臨床細胞学会総会(春期大会). 横浜, 6 月. [日臨細胞会誌 2006; 45: 251]
- 8) 濱田智美, 清川貴子, 高倉 聡, 山田恭輔, 田中忠夫. 非定型的進展形式を示す子宮頸部扁平上皮癌の一例. 第 40 回特定非営利活動法人日本婦人科腫瘍学会学術集会. 岐阜, 7 月.
- 9) 原田 徹, 小池裕人, 野村浩一, 河上牧夫, 羽野 寛. 剖検例を用いた原発性肺癌の腎転移様式についての解析. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 260]
- 10) 山田律子, 鈴木正章, 佐々木學, 鷹橋浩幸, 野村浩一, 中山順今, 小池裕人, 原田 徹, 河上牧夫. 卵巣の自然歴と疾患. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 291]
- 11) 小池裕人, 中山順今, 山田律子, 鷹橋浩幸, 野村浩一, 佐々木學, 原田 徹, 鈴木正章, 河上牧夫. 脊椎骨の自然歴. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 268]
- 12) 酒田昭彦, 金網友木子. 肝硬変における酸化ストレスと細胞増殖関連抗原の発現. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 371]
- 13) 金網友木子. 移植後早期より著名なグラフト石灰化を示した 1 男児例. 移植腎病理研究会・第 10 回学術集会. 東京, 7 月.
- 14) 山口 裕, 山本 泉, 小峯多雅, 大村光浩, 金網友木子. MPO-ANCA 関連腎炎の重複腎生検による病理学的検討. 第 96 回日本病理学会総会. 大阪, 3 月. [日病理会誌 2007; 96: 301]
- 15) Fukunaga M. (Workshop) Histologic diagnosis of hydatidiform mole and its problems. The 12th International Federation of Placenta Associations Meeting. Kobe, Sept. [Placenta 2006; 27: A9]
- 16) 山本 泉, 小峯多雅, 大村光浩, 山口 裕. 腎疾患における尿管間質病変の定量化, 標準化の試み. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 255]
- 17) 小峯多雅, 山口 裕, 大村光浩, 高崎 捷, 山本 泉. 連続切片を用いた三次元組織再構成像の動画的観察の試み. 第 95 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2006; 95: 239]

- 18) Joh K, Koike K<sup>1)</sup>, Kitamura H<sup>1)</sup>, Imasawa T<sup>1)</sup>, Nakazato T<sup>1)</sup> (Chiba-East Nat'l Hosp). Histological scoring predicts progression of renal failure in adult IgA nephropathy patients without steroid therapy. 39th Annual meeting, The American Society of Nephrology. San Diego, Nov. [J Am Soc Nephrol 2006; 17: 791A]
- 19) 川口真裕子, 新崎勤子, 本間隆志, 鈴木正章, 河上牧夫. 尿中に異型細胞を認めた乳腺浸潤性小葉癌の一例. 第45回日本臨床細胞学会(秋期大会). 東京, 11月. [日臨細胞誌 2006; 45(Suppl 2): 464]
- 20) 鈴木正章, 河上牧夫, 佐々木学, 鷹橋浩幸, 野村浩一, 中山順今, 小池裕人, 加藤弘之, 菊地 泰. 両側性の腎細胞癌. 第95回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理誌 2006; 95: 251]
- plant 2006; 20(Suppl 15): 7-10.
- 4) Nogi H, Kobayashi T, Kawase K, Tabei I, Toriumi Y, Suzuki M, Kawakami M, Morikawa T, Uchida K. Primary rhabdomyosarcoma of the breast in a 13-year-old girl: Report of a case. Surg Today 2007; 37: 38-42.
- 5) Niimi S, Kiyokawa T, Takakura S, Ochiai K, Tanaka T. Recurrent small cell carcinoma of the ovary treated with docetaxel: a case report. Int J Gynecol Cancer 2006; 16: 1944-6.

#### IV. 著 書

- 1) 鈴木正章. 第5章 腎・尿路系の疾患. 近藤和雄, 脊山洋右, 藤原葉子, 森田 寛編. スタンダード栄養・食物シリーズ4 疾病の成り立ち II. 臓器別の病気. 東京: 東京化学同人, 2007. p. 95-103.
- 2) 鷹橋浩幸. 組織診. 石塚文平, 金山尚裕, 鈴木秋悦, 安田允編. NEW CONSENSUS 新選 産婦人科診療. 大阪: 永井書店, 2006. p. 525-30.
- 3) 鷹橋浩幸, 都築豊徳(名古屋赤十字病院), 古里征国. 前立腺癌の病理-改訂された新Gleason分類(ISUP2005)の考え方と運用方法. 青木 学, 秋元哲夫編. 前立腺癌 放射線治療のすべて 局所限局前立腺癌を中心に(臨床放射線別冊). 東京: 金原出版, 2006. p. 23-38.
- 4) 清川貴子. 検体の取り扱い. 朝倉啓文, 小西郁生, 末岡 浩, 田中忠夫, 堤 治編. 完璧! 産婦人科ローテート・マニュアル(産婦人科の実際別冊). 東京: 金原出版, 2006. p. 355-63.

#### V. その他

- 1) Hano H, Takagi I, Nagatsuma K, Lu T, Meng C, Chiba S. An autopsy case showing massive fibrinoid necrosis of the portal tracts of the liver with cholangiographic findings similar to those of primary sclerosing cholangitis. World J Gastroenterol 2007; 28: 639-42.
- 2) 福永真治. 軟骨・骨形成を示した皮膚再発病変. 病理と臨 2006; 24: 658-9.
- 3) Yamamoto I, Yamamoto H, Mitome J, Tanno Y, Utsunomiya Y, Miyazaki Y, Yamaguchi Y, Hosoya T. Secondary focal segmental glomerulosclerosis following kidney transplantation in a patient with type I diabetes mellitus. Clin Trans-